

ヨハン・セバスチャン・バッハ作曲のチス・モールのフーガ（平均律クラヴィア曲集第一巻、4番）と、それをロクリアン正岡（LM）が改作した「余ハン・ロクリアン・バッハ・デス」について—

（前者は名曲であるし楽譜も一般に出回っているのに、ここでは後者の楽譜を掲載することにする。その演奏はユーチューブにおけるLMの生演奏で、また、そのPC音源の弦楽オーケストラバージョンはバッハの原曲とともにユーチューブにアップロードしていません。）

バッハ原曲は18世紀の前半のもの、LM改作は21世紀のものである。

バッハの原曲すら知らない人々が、いきなり両者の聴き比べをさせられた場合、全体的な音の響きの違いによるだけでも後者が後の時代のものだ、と感じる方がほとんどということになるのではないかな。

ところで、いきなりだが、もし二つの曲の先後関係が逆であったとしたらどうだろうか？誰かが18世紀前半にLM改作と同じものを原作として作曲したものが現在まで伝えられていて、それをまさに21世紀前半の現在、誰かがバッハ原作に当たる方へと改作したとしたら。

私はそれを考えただけで、**総毛立つ思い**がするのだ。

私の総毛立ちを裏付けるために設えられたのではないかな？と思われる文章がある。

大多数の人たちは魔物を、心の中と同じように外見も怪物的だと思いが知恵あるが、事実は全くそれに反している。通常、現実の魔物は、本当に普通な彼の兄弟や両親たち以上に普通に見えるし、実際そのようにふるまう。彼は、徳そのものが持っている内容以上の徳を持っているかの如く人に思わせてしまう

ちょうど、蠶で作ったバラのつぼみや、プラスチックで出来た桃の方が、実物は不完全な形であったのに、俺たちの目により完璧に見え、薔薇のつぼみや桃はこういう風でなければならぬと俺たちが思い込んでしまうように。

元少年A（酒鬼薔薇聖斗）著、「絶歌」の中にみる、ごく平凡な「悪」

これは、元少年Aの著作「絶歌」P71からの「懲役13年」の3.に記され、『事件を起こしてから二週間ほどたった4月上旬僕は「懲役13年」という文章を書いた。』とされるもの。（これはそのまま、彼の父母の著作「この子を産んで」P264にもある。）

このLM曲を聴いてからこのJSB曲を聴くと、まさに綺麗に整形され完璧で理想的な姿となった音楽という印象を受けるのではないだろうか。良い悪い、好き嫌い以前にである。

ところで早い話が、少年Aは、プラスチックの桃が手でじかに触れられ、ましてや切ったり食べられたりすれば、たちどころに嘘がばれる、ということから話をそらしている。いや、それ以前に、見ただけでも本物の果物とプラスチックの模造品の違いは明らか、という正常な反応を知らないかのような書きっぷりである（強引に無視しているようでもあるが、おそらくそういう感覚が薄弱なのではなかろうか？）。

それは、彼が「徳そのもの」であり得ず、そのほんの外見の図柄しか認知することしかできないからである。

しかるに、彼は少なくとも当時“魔”そのものであった。そして、そのことは32歳の本書執筆時も認めているところでさえある。

（そこで、LM改作の方が先にあったとして、そこからバッハ原曲のようなものが出てくるのは良いことだ、と感じる人があるとしたら、それは意外に大きな問題かもしれません。「何言ってるのLMさん。このバッハ原曲に限らず、彼のたいていの短調の曲も最後はピカルディのIとして長三和音へ置き換えられているじゃないの。あなたの改作も、そのあとで聴くバッハ原曲により明るく口直しされるのが音楽的欲求にかなっている、というものよ」と来るかな？「悪いが、既成の文化に素直に従いたがる人と、物事の本質について語り合う気にはなれません。あなたには哲学は荷が重すぎるのではないですか？」）

しかし、桃に限らず生き物というものは多様性をふんだんに内包したものではないか？ 複雑怪奇なものではないだろうか？。どんな小さな生き物でも生命現象である限り、見た目の美しさによって打ち消し得ぬもの、客観化、客体化仕切れぬものがあるのではないか？ すなわち生命としての事実、生理現象のようなものがあって、そこで絶えず営まれているエネルギー的な新陳代謝等々のもろもろの活動があり、それこそが、プラスチックやイミテーショングリーンが持つ短絡美とは別の、本物の（生命体が持つ生き生きとした）美を彼らに与えているのではないか？

「神の創造」への信仰が先立ち、「存在への問」を発することなく、よって音楽を抑制することにより人類最高の作曲の規範を示し得た大バッハ

バッハのこの曲は、深淵さを感じさせる、という点で最右翼と言えるものではないか。18世紀前半の音楽状況を思えば、それははずば抜けて複雑な構築物であり、現にそう響く。協和音優位の音楽の約束事が今にも破られるぎりぎりのところまで徹底的に追いこんでいる（それでも、最後は型通り長三和音化されたトニカにて丸く収めてしまっている事実も

あるが)。

その複雑志向、不協和志向性に惚れ込み、その深遠さを深淵が覗き見えるほどに強調したのがLM改作なのである。

したがって、LM改作を聴いた後でバッハ原作をきくと、はみ出す感じが大幅に減り何か粗を模糊され、曲全体が安全圏内に収納されてしまったような印象がするのではなかろうか。

バッハのすべての作品に言えることであるが、その作曲は「この世が神の創造物である。」ということを微塵も疑わない姿勢に終始貫かれている。

脱バッハ、反バッハとしてのベートーヴェン、そして「無伴奏人体ソナタ」

しかし、イエス・キリストが父なる神であると同時に子なる人間でもあった、ということ一つとっても矛盾に苦しんでしかるべきではなかったか。なぜなら、人間であったという事は糞も垂れた、ということになり、でありながら神であった、ということはどうにも座りの悪い状況に違いないからである。

バッハの音楽を聴いていると、イエスはもちろんのこと、すべての聖人から人間、万物に至るまで、創造の神、創造の神の仕業という一方へ還元して「良し」としているとしか思えないのだ（音楽から端的にそう思わせるところが物凄いことなのだが）。

その点、ベートーヴェンは全く違うのではないだろうか？ルドルフ・ゼルキンの命ほどばしる「熱情」の演奏一つ聴いただけで、バッハとの違いの大きさに啞然とせざるを得ない。

(バッハのある曲集を「旧約聖書」に、ベートーヴェンのある曲集を「新約聖書」にたとえた御仁がいたが、あらためて、首肯できるというものではないか？)

私が「無伴奏人体ソナタ」を提起したのは、そのベートーヴェンの作品ですら、プラスチック製の完璧な桃や蠟で作った薔薇のつぼみのようなコンクール向け完璧志向の演奏に、底知れないイツワリ性（虚偽根性）を覚えたからであった。

「プラスチックの桃には臓物がないが、植物の桃の実には臓物があるのだ。」ということで、副題を「音楽の臓物としての人間」としたのであった。

実際、本物の植物だと思って近づいたらイミテーショングリーンだったり、本物の人間だと思って近づいたら蠟人形だった、と気が付いた時のえげつないほどの空しさと来たらどうだろう。瞬間的なこととはいえ、己の持つ生き生きとした生命感から内臓をえぐり取られたかのような悲しみが起きているのだ。

世間一般の心情の一つ：外見のカッコよさ、完璧さへの志向が有する浅はかさ、酷薄さ
(力を求めて邁進する科学技術に善悪の意識はない)

少年Aの「懲役13年」の2には次のようにある。

魔物は、俺の心の中から、外部からの攻撃を訴え、危機感をあおり、あたかも熟練された人形師が、音楽に合わせて人形に踊りをさせているかのように俺を操る。

浅田真央さんや、羽生結弦君にこれを読んでもらうのは酷というものかもしれないが、我が旧知である哲学者の八木雄二氏の著作『ただ一人』生きる思想（ちくま新書）には次のようなことが書かれている（p182）。

だが、経済的自立は精神の自律とは全く別物である。経済的に自立するためには文明が持つ経済活動のしきたりに適合して競争に参加しなければならない。人を押しつけてゆかなければ経済的自立を達成することはできない。ところが、経済競争は人間がさまざまなものに精神的にも依存することを意味する。なぜなら欲求を持つこととは、それに依存して行かざるを得なくなることからである。経済的に自立することとは経済的地位を売ることであるが、地位を得れば、その地位に依存した暮らしが始まる。（下線、筆者）

「バッハの音楽には全てがある」とは、バッハあっての大先生の口癖らしいが、八木のこの文章一つとっても耳が痛いのではないだろうか。

ここまで読んで下さったあなた！

こんな文章書くやつ、ロクリアン正岡のほかにいるわけない！

「特異すぎて無視するに限る！」とバカの壁決め込むか？

文化が行き詰まっている現在、思考の限界を突き破ることで混迷の現代から解放されたい、と戦い進むか？

それとも？

バッハの原作は、彼の作品の中でも最も深遠さを感じさせる音楽ではある。
しかし、それでも「我々人間は、(キリスト教の) 神のもとに従順である限り幸福である。」
という信念に拘束されている狭さを感じずにはおれないのである。

勿論、それは、そのまま少年Aのプラスチックの桃などと同次元におけるようなものではない。Aの、汚い“魔”を装い隠すために“徳あるものの外形”を仮面としてかぶる、
というのは稚拙ではあるが、すでにその論法からして悪の道に踏み込んでいる。

片や、バッハは至って高尚な世界である。

ただ、生命の担い手である内臓という大事なものを、その割り切れなさゆえに捨象してしまう、
という性格は、高度の抽象性を身上とするバッハに如実であり、私の改作から見ると、それは「プラスチック」の方向にある、ということなのである。

しかたあるまい。彼にあっては聖書への信仰が(彼自身の) 主体的な善悪判断の自由を抑え込んでしまっているのだから。

「割り切り」「決め付け」の極みにあるピタゴラスの恐怖

また、次の話も連想しないわけにはゆかない。割り切り、決め付けある時までのピタゴラスが無理数を徹底的に嫌い、無理数を発見し主張すらしした弟子を殺した、という逸話一本当かどうかわからないが、そういう伝説が生まれる素地はあったのだろう—を連想しないわけにはゆかない。

なお、バッハ批判の根拠については、当ホームページ [Philosophy](#)にある「21世紀の今、音楽の本堂に則った作曲を！」を参照されたい。

今回は久しぶりにかなりラディカルな発言となり、首をひねり眉を顰める向きも多いかもしれない。それを納得、了解方向へ導くもっともよい手段は、LM の真っ黄色なアイコンの動画「10月30日への決意」(5分少々で、ユーチューブでもニコニコ動画でも視聴可) ではないでしょうか？どうぞ！